

校長室だより

No. 39

平成31年2月1日(金)

強く やさしく

六ツ美中部小学校校長

かとうよしかず
加藤 嘉一

「それならスマホを壊しちゃえばいいじゃん」 — 5年社会科の授業から —

5年生の教室へ訪問した時のことです。授業は社会科「情報化社会」の授業でした。担任の先生が紹介していたことは、アメリカの会社の新しい試みで、レジに並ばず商品を購入できるコンビニができたことの紹介でした。超スマート社会の先駆けです。そのコンビニで買い物をしたい人は、どうするかというと…

- ① そのコンビニ専用のアプリケーションをスマートフォンにダウンロードし、クレジットカードなどの個人情報を入力する。
- ② スマホで入り口の機械にその人の情報（QRコード）を読み取らせさえすれば、あとは天井にあるたくさんのカメラやセンサーがその人を追跡し、つかんだ商品（記号がついている）が何かを読み取ってくれる。
- ③ ゲートを通して店外に出れば、その分の金額がクレジット等から自動的に引き落とされ、スマホに領収金額が送られるシステムになっている。

つまり、現金は一切使わず、レジに並ぶことなく支払いが済むことになります。このことを聞いた子供たちは、

子供「商品をもって（戻したいと思って）店に戻ってきたらどうするの？」

子供「いらぬものや、余分なものまで品物をもって出ちゃったらどうするの？」

先生「出口から出たら、もう戻れない一方通行になっているはずだよ。」

子供「それならスマホを壊しちゃえばいいじゃん。」

「スマホを壊す」の言葉は、子供らしい発想だと思いました。機械を壊せば請求してくることはできなくなる。つまり自分の目の前にあるものを壊せば、請求はストップする、もしくは請求側が支払いすべき人を認識できなくなると考えたのでしょう。電子データの世界が理解できないようでした。

また、次の日も興味をもってその授業を見に行きました。そこでも子供らしい言葉が飛び交っていました。

子供「お金をもたなくて買い物ができるって、どうやってお金をとられるの？」

先生「ゲームなんかでもアイテムがほしかったら課金するために、その場で現金で払うんじゃなくて、クレジットカードからお金を出してコインなどを買うっていうのがあるでしょ。それみたいなものかな。」

子供「そんなん（課金なら）、プリペイドカード買えばいいじゃん。」

子供「ほく、ゲームやったことないからわからん！」

子供「クレジットカードってなに？」

先生「買い物するときカードを出すと記録されて、買い物した分の代金がひと月まとめて引き落とされるものだよ。」

子供「銀行からとられるの?」

先生「そうだよ。」

子供「先生。さっきの店、アプリを消せばいいじゃん。」・・・

子供の生活状況も様々でした。「クレジットカードってなに?」「銀行からとられるの?」は、見えないところで処理されるものの想像がつかない子供の姿を反映しています。「ゲームやったことないからわからん!」は、大変正直な子供です。「アプリを消せばいいじゃん。」は、ある程度スマホを活用している子供だろうと思いますが、



【5年社会科の授業】

が、やはり電子データの記録が一瞬で伝わる危険は、実感していないように思いました。全国の5年生で、もっとスマホなどを使い込んでいる子供は、「そんなこと常識だ」と言うのかもしれませんが、しかし、本校の5年生の子供たちが標準だとわたしは思います。小学生の想像力は、これくらいだと思います。

少し離れた話かもしれませんが、社会科で昔の話が出てくるのは、3・4年生からです。ただ3・4年の子供たちが想像できるのは、せいぜい自分の祖父母の子供の頃までで、狩猟時代まで遡る歴史を想像できるのは、6年生くらいにならないと難しいと言われています。国語でも、物語の登場人物の心情などについて、発達段階からどこまでとらえられるかを考え、各学年の読む力の目標が立てられています。つまり、歴史的な時間経過を認識したり、登場人物等の状況を想像したりする力は発達段階があり、一般的に難しいということです。

子供が目の前にないものを想像する力には、発達段階があります。その顕著な姿が、小見出しにした「それならスマホを壊しちゃえばいいじゃん。」だと思いました。理屈的にはすでに大人の世界で、クレジットカードなどが時代の変化とともに普及してきたし、キャッシュレス化は利点も多くあるので進化すべきでしょう。歴史的に様々な革命が起こってきたとき、しばらくの間は混乱があるけども、その後順応していくものようです。しかし、子供の健全な発達を考えると、小中学生が現金を使うなどの実感を伴う体験をもてなくなり、この先ものすごい早さで、どんどん現金のない世界に変化するとなると怖くて仕方ありません。

発達段階でそのときにすべき教育をしなかったり、発達段階を無視して無理をさせたりすることによるひずみが子供に出ることは、これまでの教育の歴史からわたしたちは学習しています。もちろん勝手に子供の限界を決めつけてはいけません。しかし、子供は大人の都合のよいように学習できませんし、期待するように育ちません。社会の変化に伴い、考えなければならないことはさらに増えそうです。学校でできる限界も出てきています。時代の変化をわたしたちは注視し、未来を担う子供のために、想像で考えるのではなく、目の前にいる子供たちをしっかりと見続けることが最も大切だと考えます。